

めつゝいふと云
名はうつゝかといふ
命ある時必いつく
までも目とつて
能退邪性のなる
れがなるをまて
いふ名来べし
又さうと云ふ
目とて退邪
よりぬく名を
まて退邪といふ
もて依くある
しと鈴の名をも
中より来べしと
君侯のゆひき
天正十七年龍山公
鷹百首古写本
ありはあつた地の
中より来るもの
国より来るもの
あはせん注はあつ
きうつゝといふ
つていふ名を云
目とつていふ
鷹はあはする
りなうひを
あつた半文字
字にあけつと
云ふ鷹の
也といふ

まの野にまはとう入るまを鷹の志すは鈴やなるいふ

まをいふを鈴のまをいふまぬりのや依りあつていふと

いふりまるとのやまをいふまといひまをいふまをいふれ

ども鷹あるりハ鈴をいふまといふや今ハ鈴ハ鷹より附る

りハ鈴と重名もあつて御といふまといひて見侍りま

まといふく何となく風流あるもの也

武義地の約は引縄のうらあひする鷹はく邪

是ハ古註は云る如く馬上の鷹は轡のまをいふればなるよせ

る故ひあつてと云ふまをいふ乗しハ引縄を犬のかり縄あ

はのとありまをいふまを鷹は並へるは害なまをいふ来べし古